

BIG LOVE

vol,
60

志不似女僧是也

僧侶はBIG LOVEの夢を見るか

文＝釋大智（編集部）



「推し」は現代日本を象徴する現象となった。

宇佐見りんの『推し、燃ゆ』（河出書房新社、2020年）が芥川賞を受賞し、「推し活」が2021年流行語大賞に選出されるなど、「推し」という言葉は特殊な専門用語としての範疇を軽く超えて、私たちの日常に深く浸透している。精神的な充足を求める現代人にとって、癒しや支えとなりうる「推し」の流行は必然的な結果だったのかもしれない。

そんな時代の風を受けて実現したのが今回の特集号だ。オタクたちが「推し」への愛を表現する際に使用する、「BIG LOVE」という言葉に注目してみようという試みである。ちなみにこの特集が決まった背景には、本誌の編集長が僧侶であり生粋のハロプロオタクでもあるということも大いに影響している。というか、彼の生き様がそのまま誌面に結実したようなものである。そんな編集長の熱意に巻き込まれるようにして、私も推しの文化圏に一步踏み入れることとなった。一僧侶から見た「推しの世界」。少しばかり、勝手な放言にお付き合いいただければと思う。

そもそも、アイドルと私の間には大きな隔りがあった。1990年生まれ私は、学生時代にモーニング娘。やAKB48などのアイドルブームを経験したが、一度もアイドルにハマることなくここまで来てしまった。それは個人的な音楽の趣味嗜好の問題だけでなく、近年のアイドルに特徴的な「近さ」が、意図的に作り出された幻想にしか感じられなかったことも大きな理由の一つであった。アイドルを「私と繋がりのある存在」として錯視し、幻想を享楽できなければオタクにはなれないのだろうと、ぼんやりと考えていた。

しかし、どうやら私は誤解していたようである。今回の特集号の制作に携わり、周りの友人からも推し活の現状を教えてもらったことで、「推し」やオタクたちが語る「BIG LOVE」のイメージが徐々に変容してきたのだ。

アイドル・推しの「尊さ」は、むしろ「隔り」によってもたらされているのではないか。隔りに盲目になることによってではなく、隔りこそが推しからの愛を基礎付け、推しへの愛を可能にしている、というのが本号を制作しながら浮かび上がった私の仮説である。

アイドルとは「偶像」である。英語圏では宗教的文脈を意味する“idol”を避け、“pop star”と表現することもあるが、日本におけるアイドルを指す場合は、偶像としての“idol”がまさに適当であるだろう。私たちが目にする彼、彼女たちは、生身の人間としてではなく、ある種の信仰対象（アイドルトリー）として現前しているのである。

そもそも偶像とは、可視化された存在を通して、不可視な領域と結びつくという構造を指す。表層（＝アイドル）／深層（＝聖性）の関係である。この類型から、次のように言えるのではないだろうか。推し活の人たちは、アイドルの「単なる表層の近さ」に感動しているのではなく、「超越的な聖性の顕現」というアイドルの在り方自体に尊い愛を感じている。そしてアイドルの深層にあるピュアなエロス（生命力）と感応道交しているのである。オタクたちはアイドルという存在にここまで射程を持って向き合っているはずだ。なぜなら「深読み」の愉悅こそオタクの本領だからである。

その一方で、アイドルはアイドルトリーとして未成熟な存在でもある。日本には古代から小さな神、幼形の神の信仰が根強くあり、「一寸法師」に代表されるような神の成長譚を大切にしてきた。アイドルは聖性（理想的なアイドル像）を実現するために修行し、成長していくアイドルを信者たちは推す。そして推し続けることでアイドルの聖性はさらに増幅していくのである。

アイドルはピュアな領域から来迎してきた未成熟な存在であり、それを信仰形態へと昇華するまで推す、という虚構を楽しむこと（推し活がこの虚構に自覚的だということも今回得た学びの一つである）。その場に集う演者も観客も一体となって虚構の場を立ち上げる。このような営みは日本が伝統的に育んできた一つの文化様式でもある。これを世阿弥は「一座建立」（『風姿花伝』）と呼んだ。

推し活とは、このような感応道交・一座建立のカタルシスを求める心身の運動である。そして、アイドルとオタクの両者が超越的な聖性に生きる力を賦活され、また聖性に向かって共に歩んでいく、という終わりなき営為こそが「BIG LOVE」なのだ。と言えるのか言えないのか、よくわからないけど、そんな気がする。

アイドルと推し活の構造は宗教と類比的である。そして、このことを察知している人はあまり多くないと思う（だからフリスタでこんな特集をやるわけだが）。仏教の立場で「推し」を語るならば、推しの愉悅もすべて一時的な現象であり、執着であり、依存であるため、「推しには警戒してのぞめ」となるだろう。と同時に、深層の聖性と感応道交して、一座を打ち建てる刹那の破壊力に、「一期は夢よ、ただ狂え」と身をゆだねる宗教性もあなどれないのである。

雑駁な感想をつらつら述べてしまった。本編で紹介される推し活の内容は、こんな抽象的な話ではなく、固有で具体的な立場から発される実践者たちの声である。それぞれの「BIG LOVE」に触れることで、「自らにとっての豊かさ」と向き合う一助になれば幸いである。私もアンジュルムの楽曲を聴き始めたところだ。

推す一人と推される一人。そこから始まる物語には、さまざまな愛が交響している。もちろん愛は綺麗事ではなく、痛みを伴う。独占したい気持ち、与えただけ見返りをほしくなってしまう気持ち、一寸先は常にしがらみだ。そんな愛の修羅場だからこそ、推しの文化圏にはそれらを突破しようとするビッグな愛のあり方が、自覚的に問われ続けているように思える。

話を聞いてみたいと思ったのが、一度聞いたら忘れられない「ばいばいでか美」という芸名を昨年末に改名した「でか美ちゃん」だ。バラエティー番組「有吉反省会」の出演をはじめ、楽曲の作詞作曲やアーティストとしてステージ出演、コラム執筆など、幅広い分野で異彩を放っている。そんな推される立場であるでか美ちゃんは「ハロー！プロジェクト」の熱烈なファンとしても有名だ。特に Berryz 工房、カントリー・ガールズのメンバーで2017年に芸能界を引退した嗣永桃子さんつぐなが（通称：もち）を10年以上推していることは、ファンの間では生きる伝説として語り継がれている。

推されながら推す。それも尋常じゃないくらい人生をささげて推す。編集部がでか美ちゃんに巻頭インタビューをお願いしたと思ったのは、推しと真摯に向き合う彼女の姿にBIG LOVEの影を感じたからにはほかならない。推しとヲタク、ヲタクと推し。“私”は“あなた”をどのように受け止め、何を願うのか。そこには人類普遍の他者認識、つまり愛がある。推す側・推される側のはざまに生きるでか美ちゃんに、BIG LOVEとは何か尋ねてみよう。

巻頭インタビュー

でか美ちゃん BIG LOVE



Deekami-chan
BIG LOVE

ものすごく広い心で

「応援してくれてありがとう」って

言葉にまとめてくれること自体が

すごい愛じゃないですか

推しメンの名前を音読して心を落ち着かせる

——でか美さんといえば、もちさんのファンとして有名だと思うのですが、ほかにもハロプロのメンバーを推しているらしいですよ。一人ひとりに対する気持ちに違いはありますか？

でか美 高校生のころからもちを応援してきたので、本当に幸せなヲタクだったと思います。だからといって、ほかの推しメンに何かが足りないとかではなく、それぞれにちゃんと思いがあって。もちが卒業した心の穴は、ほかの人で埋まるわけではない。今、応援してるアイドルが本当に好きだから応援しています。それ以上でも、それ以下でもない感じで。

——長年アイドルを推し続ける生活ってどんな感じですか？

でか美 応援すればするほど、生活に密着してるといいますか。「週末会えるから、頑張ろう」「辛いときにはこの曲聞こう」と思って生きています。

私、推しがいるものだと思って、人生を始めてしまっているんですよ。親と縁切れるみたいなことって、そうそうないじゃないですか。そういう感覚に近いのかもしない。

——日常生活の中でどんな瞬間に「推しに救われた」と思いますか？

でか美 ほぼ毎日。ちょっとSNSが更新されただけで、拳突き上げて「更新されたぞー」みたいな感じ(笑)。本当に日々元氣もらっています。

明日のライブに行くことすら悩むくらいメンタルに限界がきていても「やっぱライブ行くか」って思える自分がいるんです。行って嫌な気持ちになるわけないと約束されている場所って、正直そんなないじゃないですか。

——でか美さんの「Twitter」で「推しメンの名前を音読して心を落ち着かせる」と言われているのが気になったのですが、どんなときに言いたくなるんですか？

でか美 家のソファに座っていて、「あー、森戸知沙希」みたいな感じで。

——えっ、どういうことですか(笑)？

でか美 特に意味がないので、理解しがたい感情だと思うんですが。何もない日でも「知沙希ってめっちゃいい名前だな」とか改めて思うことがよくあります。

あと「今日はブログの更新がないってことは、すごく忙しかったのかな。頑張ってるんだな」って勝手に想像して救われると思いますか。「自分もすごく疲れた一日だったけど、この地続きのどこかに推しメンがいると思うと頑張れるな」みたいな。

——あー、なるほど。名前を通してこの世界と一緒に生きていること自体によるこびを感じているということでしょうか。

でか美 そうだ。これが一番大きいのですが、アイドルを好きでいることは、相手によつぽど迷惑かけない限り、拒否されない。それがすごいことだと思っています。

メンバーの服を特定して、同じものを買ってイベントに着ていったら、「おそろいだね」ってよろこんでくれる。これって、普通に考えたらありえないと思うんですよ。

こつちが勝手に気持ち悪い行動しているのに、ヲタクから愛されることを全く照れずに拒否することなく、ものすごく広い心で「応援してくれてありがとう」って言葉にまとめてくれること自体がすごい愛じゃないですか。アイドルが自分を受け入れてくれることにすごく感謝しています。

——日常生活の中で、それくらい広い心で受け止めてくれる体験ってなかなかないですよ。

でか美 ないと思います。ちょっとびびりますもん、本当に。

——自分がそういう風に受け止められたことよって、ご自身のファンに対しても同じように接したいって思われるんでしょうか？

でか美 そうですね。自分で活動することよって、服をまねされることや全国どこにでも来てくれることが、純粋にうれいんだって気づきました。まじでうれいし、まじでヲタクのことが好きだなって。相手の気持ちを受け入れる側を経験してみても、ヲタクから応援してもらった気持ち

でか美 そうですね。名前はお守りみたいな感じですよ。「両親は本当にびびったり名前をつけたな」とか30分くらい考えちゃいます。

勝手な愛をもものすごく広い心で受け入れてくれる

——ヲタクとアイドルの関係性って、どうしても一方通行のように見えることもあるのですが、推しが「自分のことを思ってくれているな」って感じる瞬間ってありますか？

でか美 私は本当に頭がおかしいので、めちゃめちゃ推しメンから愛されていると思っ生きています(笑)。単純に「アイドルは仕事だから」といえば、それまでなんです。自分の誕生日や成人式の日にイベントしているのを見ると、「友達と過ごしたんだろうに」って思うんですよ。

個人の人生を少しだけ犠牲にしてアイドルしてくれてると感じてしまう。それでもステージに立つことを選んでくれていること自体が、すごくファンを大事にしてくれてるって思います。すごく恐ろしい話なのですが、活動を見ていると勝手に愛を感じてしまう(笑)でも、それがいいのかなとも思っています。そうやって勝手に思っおこう！みたいな。

——活動してくれていること自体に尊さを感じられているんですね。

を「よし受け入れよう」と思っているわけじゃないということがわかったといえますか。

自分のファンのこと推してるアイドルのことも当たり前存在だと思わないっていうのは、自分に推しメンがいて、自分自身が誰かの推しメンになっている立場だから思うのかなって思います。

ヲタクが推しを思う気持ちは、おばあちゃんが自分を感じる気持ちに似てる

——推しに救われていると思う反面、のめり込み過ぎてしんどいときはありますか？

でか美 今でこそ普通に働けるようになりましたが、全く売れてない時代は推しの現場に行くために自分の生活を削ることがザラにありましたね。

普通の人にとっては、ライブに行くこと自体、一生に一回あったらいいような行事だと思っんです。でも私はアイドル現場の楽しさを知ってしまったって手前、そこに参加できないときに「何のために働いているのか分からない」という気持ちになっ。

でも、のめり込み過ぎてアイドルとの距離感を間違えてるって思うときは、一回冷静になろうとします。「ライブに行く代わりにBuy」見たらいいし」とか。推しのブログにライブに来られなかった人に対しての言葉が少しでもあれば、それを見て「大丈夫、大丈夫」って自分の気持ちを落ち着かせてますね。

私、推しがいるものだと思って、人生を始めてしまっているんですよ。

オチャ ノーマ いしぐり かなみ
OCHA NORMA の石栗奏美ちゃんと同じ服で
小関舞ちゃんと同じネイル。



でか美 卒業してからは、もちちの新しい思い出は増えないけど、ずっと好き今まで。過去のライブ映像かかなりの頻度で見ると、毎回新鮮な気持ちで「めっちゃ好きだな」って思うんですよ。別に思い出が美化されているわけではなくて、そのときの記憶がただある、ってだけなんです。

と、めちやめちや寂しいっていう。
——2017年に10年以上推し続けていたもちちさんが引退されましたが、でか美さんの心の中でももちちさんの存在は、どのように生きていますか？

きれいな思い出があるから、自制心を保てたり頑張る原動力になったりする。特にもちちはバラエティ番組にもいっぱい出ていたので、もちちを思い出して踏ん張る瞬間みたいなのがありますね。私がテレビの収録で「今日は私が頑張らなくていいか」って思っちゃうときに「もちちだったらそんなこと思ったとしても、頑張るだろうな」って。
あとは、もちちがデビューした日や、誕生日、卒業日といった記念日に当然のようにケーキを食べてお祝いします(笑) 本人がいらないのにみんなで集まってお祝いするんです。
それが自分の年間行事に組み込まれている感じが、心の支えになっているなど。

——もちちさんが卒業した寂しさははまだ残っていますか？

でか美 ありますね。たとえば、顔のパーツを選んで女の子の似顔絵を作る「似顔絵メーカー」ってたまに流行るじゃないですか。アイドルヲタクは推しの顔を作る人も多くて、私も毎回もちちの顔を作っていて(笑)

でも、卒業以降のことは何も知らないし、顔も見えない。もちち



小関舞ちゃんと同じ服、かばん、ネイル、アイシャドウでパースデーイベントに行ったときの写真

——自省しつつ推しに向き合っていく姿勢、修行僧みたいだと思いました(笑)
過去のツイートでも「私は推しメンが一度好きと言ったものはずっと好きなんだと思いついて、それはおぼあちゃんが自分を思ってくれていた感情に近い」とおっしゃってましたよね。

でか美 推しメンが「〇〇が好き」って一回言っただけでヲタク側は一生覚えていて。たった一回の発言なのに「あの子はこれが好き」って思い込んでしまう。アイドルも一人の人間なのに、こっちが押し付けてキラキラ付けてるって思うときがあるんです。
そのツイートをしたときは、「納豆好き」って言っている子がいて、それで「あの子が好きな納豆だ」って思いながら自分も食べてたんですが、よく考えたら、最近全く納豆の話していないって気づいて(笑)

誰にでも一時期ハマって食べるものってあるじゃないですか。それをおぼあちゃんが「あんたはこれが好きやった」って、毎回同じお菓子をくれるのと同じだと気づきました。もらった側としては、気まずいから食べるしかない。だから「この子はこういう子なんですよ」って、理解したつもりになって相手に負担をかけてしまうのは嫌だなと。

ただ、芸能人ってキャラがあった方がいいので、こっちがうまく乗っかっているみたいな節もあるんです。でも、アイドルが好きと言ったものを後で撤回したときに「アイドルも人だし」と受け入れなきゃと思います。

ただ好きだから応援してるけど、卒業はいつだって寂しい

——推しのSNSを毎日チェックして、全国のライブ会場に通い続けるうちに、推しのいない生活が考えられなくなりそうです。

でか美 推しがいて当たり前と思ってるわけじゃないけど、やっぱり当たり前になってきちゃう。分かってはいても、「卒業します」って言われると、「えー」ってなりますね。

——アイドルファンの中には、「アイドルは偉いからいい」って言う人もいるじゃないですか。でも、でか美さんは「有限だから応援してるわけじゃない。ただ好きだから応援してるだけで、卒業はいつだって寂しい」とよくおっしゃっていますよね。

でか美 高校に入学したときに「どうせ3年後にバラバラになるから、友達作らなくていいや」ってめったに思わないじゃないですか。その感じに近いのかもしれない。アイドルを好きになって、いつか卒業すると分かっている。でも、いざ卒業するってなる

の似顔絵を作ろうと顔を思い浮かべたとき「卒業ライブから完全に時間が止まっている」って実感するんです。そういう瞬間に寂しくなりますね。

推しに対する思いは「ガチ恋」に決まっている

——過去のインタビュー記事で「推しに対する思いは「ガチ恋」に決まっている」とおっしゃっていましたが、でか美さんは推しの恋愛についてどう考えていますか？

でか美 ファンが推しの結婚にショックを受けるというのを第三者が「気持ち悪い」と思う風潮はかわいそうだと思う。自分が応援してもらった立場があるから思うようになったのですが。たとえば、私に彼氏ができたり、結婚したりするってなったとしても、ショックを受ける人はいるのだから、ぼんやり思っています。だから、私はヲタクに「いつかおまえらにショックを与えてやる」って宣言をしていて(笑)
ヲタクもいろんな人がいていいし、相手に迷惑さえかけなければどういいう愛情表現があってもいいなって思っているんです。い「ガチ恋ヲタクを見ると「この人は自分の思いに向き合っていて、すてきだな」と思っていますね。

ガチ恋って言葉が便利過ぎて使っちゃうのですが、普通の片思いとして捉えてみると、そりゃ、好きな相手が恋愛してたら

※ガチ恋=アイドルに本気の恋愛感情を抱いてしまった状況を表す言葉



「推しみたいなヲタク になろう」って思っ てくれるのはうれし いですよね。

ショックを受けますよね。でも、その場合、「裏切られた」とは言わないじゃないですか。だからガチ恋ヲタクは、「ガチ恋ヲタク」って言葉に甘えるなよ、みたいな気持ちもあって。「自分の片思いとして処理したらよくない？」って思います。

——以前、YouTubeの番組で霊が見えると噂の芸人さんがでか美さんを霊視するという企画があり、「亡くなったファンの方が両肩にとりついている」と鑑定されていましたよね。除霊の話が上がったタイミングで、でか美さんが霊に「大丈夫、除霊しないから」とおっしゃっていて驚いたんです。何が本当なのかはわかりませんが、霊の気持ちすらも受け止められるのでか美さんの大きさに感動したというか。

でか美 自分に霊がとりついていると聞いたときは正直怖かったんですが、それが自分のヲタクだと知ったとき、安心したんですよね。外見の特徴を聞くと、いつもイベントに参加してくれていたファンに似ています。その方、最近見なくなりました。いつも私のイベントのレポートをあげてくれるプログラムのドメインも切れ

でか美 たえば、ライブ終わったあとと一緒にチエキを撮る撮影会をしながら「楽しそうに見てくれてたね」「こないだTwitterで〇〇ってつぶやいてたね」ってたわいもない話をしています。

あとは、集合場所のヒントだけSNSで伝えて、みんなでカラオケに集合して歌ったことも。実際に集まってみると、どんな人が来るか分からないけど、もし変な人が来たとしても、みんなが守ってくれるだろうなって。

——でか美さん自身は、ファンの方とどう関係でいたいですか？

でか美 極論を言うと、「お互い健康であれば何でもい」と思っています。だからのめり込み過ぎたり、好きすぎたりして暴走しちゃったらおしまい。

自分とハロプロの距離感は、すごく健やかだと思っています。こういう仕事をしている以上、共演するタイミングもあるので、自分自身を客観的に見たときに、不思議なヲタクになっちゃっている感じは正直するの

ですが。

そんなときに、自分のヲタクに言われてうれしかったのが「好きすぎて」でか美さんと自分の距離感がおかしいかなって思ったら、ハロプロを推すでか美さんの姿を見て、「これくらい距離に戻ろう」って思えた」って言ってくれたことでした。「推しみたいなヲタクになろう」って思ってくれるのはうれしいですね。ヲタクは推しに似てくるってよく言いますが、自分のヲタクは私みたいな人が多いなって思います、いつも。

もちに携わるものに触れて おけば必ず楽しい気持ち になれる確証がある

——でか美さんが芸能界を引退するとき、自身のファンに向けてどうい言葉を残したいですか？

でか美 もちが引退ライブでヲタクに向けて言った言葉がずっと心にあって。「もちちは、ビジュアルもいいし、愛嬌もあるし、運もあるのでこれから大丈夫です。私にたくさん幸せをくれた分、これからは自分が幸せになってください」って言ってくれたんですけど。

「もちちに幸せになってくださいって言ったからには、幸せにならないといけない」と思いました。それもお守りというか、ものすごくハッピーな呪いぐらいの感じが残っちゃってます。

もし自分が引退するときがきたら、もちが残した言葉をまねするわけではないですが、同じようなことを心から思っていると思います。「引退しても忘れないでね」とは言うかもしれないけど「ほかの子を好きにならないでね」とか、誰かの人生を縛ってしまうようなことは絶対に言わないだろうなって。「本当に健康でいてくれ」って、今でも毎日思っていることを伝えるだろうなって思います。

——「大好きなもちに「幸せになってください」って言われたからには、絶対そうでありたい」と思うのは、相手に完全な信頼がないと出てこない言葉なのかなと思います。

でか美 10年以上応援していて、本当に嫌な気持ちになったことがないし、もちに携わるものに触れておけば、必ず楽しい気持ちになれるっていうのが分かっているから信頼していますね。

もちってずっとぶりっ子キャラだったわけではなくて、何回か転換期があるなって思っています。変わることを恐れないというか、変わっていくけど、変わらない部分を持ち続けるみたいなバランス感覚がすごく好きです。本当に一人の人間として尊敬できる方でした。

もちの言動を何でも信用して、神様みたいな扱いをしているわけではないのですが、自分の道しるべとして信頼して大丈夫だと思っています。もし、間違っていたとしても「この人に言われたことでミスするのだったら別に平気だな」といいますか。

ていたので「もしかしたら、何か不幸があったのかな」って心配してて。なので、もし私にとりついている霊がその人だとしたら「ここに居てくれたんだ」って気持ちで。

——ファンの方に対してそういう大らかな気持ちになれるのって、ものすごく特別なことだと思うのですが。これまで、どうやってファンの方と交流してこられましたか？

——最後になりますが、でか美さんにとって「BIG LOVE」ってどういった愛のあり方だと思えますか？

でか美 無条件の愛って言えば簡単ですけどね。別に無条件じゃなくて、条件があったとして、たとえそれが破れることがあっても許せることがBIG LOVEかなと思います。無条件の愛というよりは、「条件が別に破られてもいいや」とその瞬間瞬間に相手の幸せを思いやれているということでしょうか。

それはハロプロに教えてもらった愛ですし、自分のヲタクに教えてもらった愛でもありますね。

でか美ちゃん

1991年5月3日生まれ、三重県出身。多方面から評価される的確なコメント力を武器に、場所を選ばず大活躍。自身の楽曲の作詞作曲やライブ活動、楽曲提供、グラビア、映画出演、コラム執筆などジャンルやメディアにとらわれず活動中。様々なユニットにも参加している。一度聞いたら忘れられない芸名で活動していたが、いろいろ考えて2021年12月に親しみやすい名前に改名。好きな色、桃色。好きな動物、象。好きなこと、アイドルの応援とバラエティ番組鑑賞。



「推す」について語り合う座談会

なぜ人は推すのだろう。

自分ではない何かを心に置いたり、自分ではない誰かの活躍を楽しみにしたり、自分のものではない世界を望んだり、「推す」とは不思議な営みだ。「推す」と一言でいっても、向き合い方は人それぞれ。推しとの関係性は、推しが所属する文化圏や推す者の人生が色濃く反映されている。そこで開催したのが、「推す」について語り合う座談会。三者三様のBIG LOVEを見届けよう。



頼コケ美
ハロー！プロジェクトヲタクの僧侶(真宗大谷派)。6歳からハロプロが大好き。

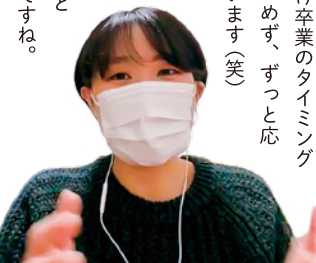


細川 昭々
宝塚歌劇団ファン歴16年の漫画家。宝塚大劇場から徒歩15分のところに住んでいる。



竹田 磨央
ジャニーズファンのIT企業社員、時々フリーの編集者。現在、プロレス団体「DDTプロレスリング」も推している。

推すきっかけはなんだったんですか？



頼 中学生のころ、モーニング娘。の全盛期が一回終わって、私もヲタクを卒業するのかなと思っていましたが、恋愛や仕事で挫折を経験するたびに、ハロプロが寄り添ってくれたんです。周りの友だちがヲタクを卒業する中、私だけ卒業のタイミングがつかめず、ずっと応援しています(笑)

特定の誰かが好きというよりは、ハロプロの精神性とか歴史が好きなのよって変わったヲタクですね。

細川 宝塚を好きになったきっかけは、ツカファンの編集者さんに連れられて公演を見に行っ、舞台上から当時の花組トップスターの春野寿美礼さんに「僕たちは出会ってしまっただ」と言われたことですね。もちろん、芝居のセリフなんですけど(笑)。2階の一番後ろの席から見えたので、舞台は豆粒くらいの大ささしか見えなかったんですが、劇場全体を寿美礼色に染めていたのに圧倒されて、がんじがらめになった感じでした。

竹田 私は小さいころからアイドルを推し続けていて、あんまり自分の人生を生きていないといえますか。初めて好きになったのは木村拓哉さんで。同級生たちが「ドラえもん」と

なぜ推し続けるんですか？

細川 今はコロナ禍で休演していることがあるのですが、一番多いときは週3のペースで観劇していて、同じ演目を最高18回も見たことがあります。というのも一つの舞台に80人くらい出演するので、一人ひとりちゃんと見て応援したいという気持ちでして。何回見ても、毎回新鮮で、毎回泣きます。

竹田 すごく気持ちがわかります。ジャニーズも舞台は多いですが、岸君が帝国劇場に立ったときは「永遠に見てられるじゃん」と思いましたから。



役柄、演目の素晴らしさと脚本の魅力もあるのですが、岸君が演じる主人公が苦悩する姿を見て「なんて愛しい主人公なんだらう」と感情移入していくというか。あとは岸君の存在自体が「何でこんな美しくって尊いんだらう」って気持ちもあります。こんなにいろんな感情が心を支配する多幸感みたいなのは日常の中では得られないけど、舞台を鑑賞すると、とんでもなく浴びることが出来る。それで麻薬みたい「もう一回吸わせてくれ」って感じになりますね(笑)

細川 私も舞台を見るときは、その世界観に引き込まれて、めっちゃめっちゃうっとりする

そこまで推したくなる理由はなんですか？



細川 ちょっと語弊があるかもしれないですが、宝塚歌劇のプログラムって駄作が多いんですよ(笑)。ファンが見ている、「どうしてこんな舞台やるの？」っていうような公演があって。でも、どんな公演だったとしても、タカラジェンヌさんは輝いてなきやいけない。それがすごく歯がゆくも愛おしいときがあります。

頼 昔はハロプロも曲や衣装、グッズが意味不明なものが多すぎて、全然メンバーの良さ

かのアニメを見ている中、私はキムタクを追ってたんです(笑)。その後は、青春の全てをV6にささげて。それからいろんな男性アイドルを経て、K-POPの東方神起のユンホさんを推していました。みやびな顔をされて、もう存在そのものが仏像っていう感じでしょうか。アイドルを見るときって、人間性に関しては本当のことが分からないので、主にパフォーマンスを見るじゃないですか。でも、ユンホさんは見ていると息苦しくなるくらい正しく生きてる人だと思っていて。

頼 あー、わかります。ハロプロのヲタクも理想のアイドル像をしっかり持っているアイドルを好きな人が多いんですよ。

竹田 そうですよ。一人の人間を100%信じてることってすごく難しいと思うんですけど、彼のことは、もうゴロツと信じてしまっていて。だから、ちよつと別というか仏に近いのかもしれない。

頼 今の推しはKing & Princeの岸優太君なんですよ。

竹田 はい。岸君ってグループの中ではおバカなキャラクターなんですけど、お芝居になると、ちよつと陰るんですよ。だから最後に死んじゃう役がやたら多くて(笑)。歌もうまいけど、しゃべりや振る舞いがちよつと王道のジャニーズっぽくなくて。そういうところも好きです。

を生かしてないって思うときがありました。最近、かっこいい曲調とも増えている、「いいじゃん」って思う反面、「ダサくないと、ハロプロじゃない」という複雑な気持ちで。たまにはめっちゃダサイTシャツを着たい(笑)

竹田 わかります。運営側の意図を理解しますよね。

類 やっぱファンが増えるのはうれしいんですけどね。でも、たまにはダサイこととして「私たちが支えない」という気持ちにさせてほしいな。ダサイグッズで有名なのが、ピンクのTシャツに、黒字で「一生道重」って書いてあるのがあって、「こんなダサイTシャツ着られるの、うちくらいだから」みたいな(笑)

細川 そうですよ。こんなつまらない舞台はもうファンしか見られないから、一生懸命見てあげなきゃ」っていう(笑)

竹田 その気持ちはジャニーズファンも一緒ですね。古き良きジャニーズは、やっぱりダサイし、昔からのジャニーズファンは、**トチキソング**を歌ってる姿が好きなのも多い。ジャニーズ、ハロプロ、宝塚歌劇団に通ずる危ない沼ですね。

どうしようもない演目や曲でも演者側は素敵に演じるわけじゃないですか。そこがたまらないっていうのもありますよね。やり切るといいますか、「プロだな」みたいな。

※トチキソング：意味不明な歌詞なのに、聴けば聴くほど癖になる中毒性の高いメロディの楽曲のこと。

類 なるほど。でも、その関係性だと大変なことも多そうですね。

竹田 そうなんです。特にこの2年間は本当に最悪で。King & Prince からメンバーが脱退したり、V6が解散したり、いろんなことが同時に起きちゃって、心がパキパキに折れて立ち直れなくなっちゃいました。「もうやってられん、仕事のアイデアも何にも浮かばん」と仕事も辞めてしまっ。

でも、そのときに「推しに人生を任せちゃダメなんだな」とも思ったんです。ずっと前から気づけばよかったです。ずっと心折れて、もう何にも感動できなくなっちゃったときにお仕事で「DDTプロレスリング」っていう団体に出会って。プロレスって、お客さんを増やすことも大事だけど、それ以上に本人たちが思い描く理想のレスラーになれるらしいんですよ。そこで「売れる」以外の価値観を得られたんです。プロレスを見てたら視界がひらけて、「自分の人生を肩代わりしてもらっていいよ、もう辞めよう」と思った。やっと呪縛から解放されて、ほかの推しに対しても楽な気持ちになれました。



推していく中で何か葛藤はありますか？

類 私は推すしんどさみたいなものをあんまり感じたことがなくて。たとえば、恋愛スキヤンダルが出て、「その女の子の人生だし」と思うんです。自分のやりたいことを見つけてグループを卒業していく人に対しては、「新しく自分のやりたいことが見つかったんだ」ってうれしくなって。卒業したメンバーが芸能界を引退して何も情報が追えなくなっても、「きっと○○なら大丈夫。幸せなんだろうな」と信じています。

というのも、私はメンバーの人生にあまり関与したくないって思ってるんです(笑)。だって若くて一番楽しい時期に恋愛もせず、ユタクのために活動してくれてるんですよ。それってすごい尊いことだと思ってる。普通の女の子だったら、大勢の人間がその子の人生に関与しないじゃないですか。なので、表舞台から去ったあとは、好きなこととして幸せになってほしいなと思ってます。

竹田 私が誰かを推す理由を考えたとき、自分の推しが爆発的にブレイクしてトップを取



る瞬間をどうしても見たいという気持ちがあるんだと気づきました。最初に好きになったキムタクが凄まじく売れたので、それをもう一度味わいたいと思います。

類 いや、今の推しの岸君めっちゃ売れてると思いますよ(笑)

竹田 そうなんです。自分でもちよっと理想が高過ぎるんだと思うんです。なんせ私の推し歴はキムタクからはじまったので、毎月9月9日出てほしいくらい思いがあって。

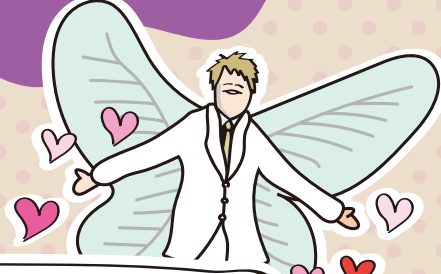
だから、私と推しの関係性って、もう癖で治らないんですが、推しが仕事で成功すると自己肯定感が上がるんですよ。なので、もう生きることと推しの存在が切り離せなくなっている。自分の人生がサクセスしなくても、推しが輝くことで心のバランスを取っていると思います。推しの存在が生命維持装置みたいな。自分の人生と並走してアイドルがあって、推しと生きること自体が人生そのものなんです。



ファンの間で伝説の卒コンと称される「嗣永桃子ラストライブありがとうおともち」のDVD。



推し活の末に制作した「アイドル雑誌」仕様のプロレスラーカレンダー（公式）の表紙画像。



竹田 今、聞いて思ったのは、宝塚歌劇団もハロプロも卒業があるじゃないですか。だからファンはそのタイミングで気持ちを切り替えられると思うんです。でも、ジャニーズはアイドルをやるうと思えば、20年以上続けられるので、卒業がなかなかこないんですよ。

類 ええ、めっちゃ羨ましい。

竹田 ずっと応援できる反面、推しがアイドルを続けているとファンをやめるタイミングがないといえますか。

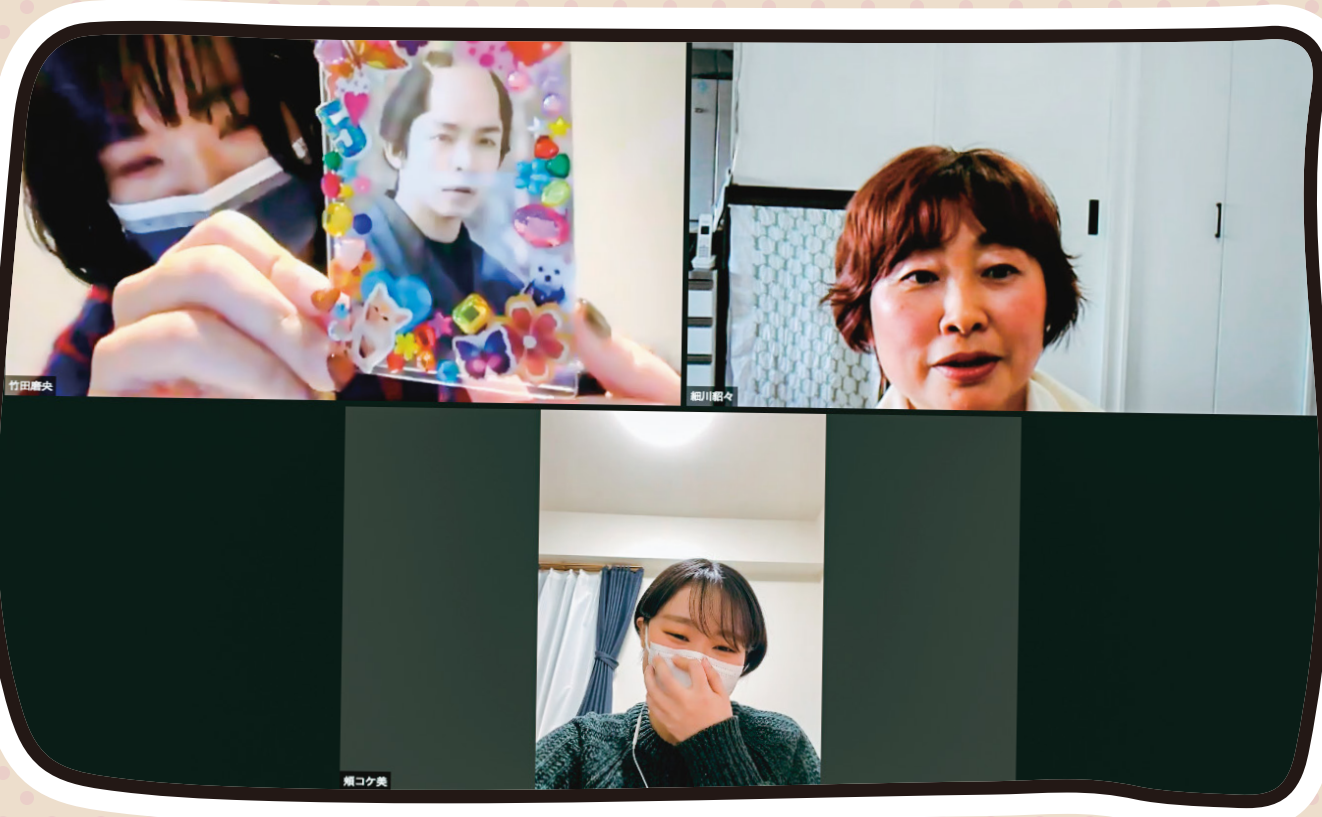
こないだV6が解散したとき、ずっと現役で推していたわけじゃないのに、いざ解散するって聞いたら実家が建て壊されたような気持ちになったんですよ。長い期間、芸能活動してる様子を見てたから、身内のように感じていたのかもしれない。

細川 そんなことがあったんですね。私も自分が応援してた人の退団が決まったら、あと何回観劇に行けるか数えて、残りの時間をかみしめています。宝塚歌劇団の退団発表は組の子が集合するときにあって、その日は「自分の好きな子が退団したらどうしよう」って、みんな怯えているんです。退団日には、白い封筒が自宅に届くんですけど、それを見てファンはポストの前で泣き崩れています。

私の場合、タカラジェンヌさんが退団すると別次元の存在から人間に戻っていく感覚になるんです。言葉で説明するのは難しいのですが、私はタカラジェンヌさんのことを人間じゃなく妖精だと思っていて。宝塚歌劇の中にいるときは妖精として生きているので、そういう人たちを見て楽しんでいるという感じなんです。なので妖精の世界を出たら、人間として生きてほしいなという思いがあります。



トップスターが退団する千秋楽で配られるペンライト。公演内で使用するのはなく、最後に特別に行われるサヨナラショーのときに使うもの。



推しから愛を感じることはありますか？

細川 私は男役のタカラジエンヌさんが自分の壁を突き抜けてかっこよくなる瞬間を見たときに愛を感じますね。

男役といっても、もともとは女性なので、完全に役になりきるのには難しいことなんです。でも、ずっと見続けていると、ある時点で何かをつかんだという瞬間が必ずくるんです。急に色気が出て、かっこよくなつて。ずっと見ていたタカラジエンヌさんが男役として輝き出す瞬間に出会うと、「この人は宝塚愛があるな」って、ときめいちゃいます。その思いを受け取ったときに愛を感じる。

類 私の場合、ハロプロを推しているとか何か大きな存在から愛を受け取っているような感覚になるんですよ。

ハロプロのアンジュルムというグループが歌う『46周年 LOVE』っていう曲の中に「夢に見てた自分じゃなくても真つ当に暮らしていく今どき」っていう、ダメな自分を肯定する歌詞が出てくるんですよ。それをアイドル

がさらっと歌ってるのは、ものすごいことだと思つてまして。ヲタクはもちろん、メンバーもハロプロの曲に救われる対象になっているんじゃないかなと。

あと私は真宗大谷派という宗派の僧侶なので『歎異抄』という書を読みますが、「これ、ハロプロの歌詞じゃん」と思うようなことがよくあるんです。どうしようもない自分を見つめられるからこそ阿弥陀仏が救ってくれるという教えがあつて。だから僧侶って教えを説く立場のように思うかもしれないんですが、実は同じようにみんなと一緒に悩んで学んでいくスタイルなんだと思つてます。

凡夫である私たちが阿弥陀仏の願い、働きに会つて、どんなことがあつても見守ってくれていると感じられる。そういう仏と凡夫のつながりがハロメンと私たちの関係性と近いのかなと。

竹田 私の場合は、推しから何かもらつてよりも、一方的にまなざしを注いで、自分も浄化されていく感じですね。推しの人生には干渉できないので、基本的には一方通行な関係のかなと。



お話をさせていただいてありがとうございました!!

これからの推し活に望むことはありますか？

類 今ではもう、ハロメンのことを親のような心で見えるようになっていて。ずっと応援したいし、ハロプロという大きなものを守つてほしいっていう願いがあります。

細川 私の目標は95歳まで生きて、宝塚歌劇創立150周年のイベントを見ることなんです。なので、それまで細く長く応援していきたい。10代の女の子がどうやって男役に変身して、退団していくのか、そういう過程を見ていきたいです。

竹田 私は「推さない人生」もやってみたくて思つてるんですけど、もうそれはできないので諦めています(笑) コロナ禍になってエンタメが不要不急なものとなされて、次々とライブやイベントを中止にされましたが、本当はそうじゃない。

エンターテインメントの豊かさは平和の象徴といえますが、心豊かに生きていくために絶対必要なものだと思うんです。

ですので、これからも編集の仕事を通じて「エンタメの文化って大事なんだよ」ってことを伝えたい。プロレスにしろアイドルにしろ、スポットライトに当たってる人を見ることの楽しさっていうのは、ずっと紡いで受け継いでいきたいですね。

墓前の私たちは不思議だ。亡くなった者たちの姿が見えるわけでもないし、声が聞こえるわけでもない。それなのに、確かに言葉が生まれている。見えない者を見つめ、聞こえない言葉に耳を澄ませようとしている。なぜ墓前で話したくなるのだろう。言葉の応答がなくても、会話をしているのはなぜなのだろうか。

これを個人の信仰の問題とすることは簡単だ。しかし味はなく、電話中に自分の音声は正常に伝わって

「もしもし」という言葉がある。その言葉自体に意味はなく、電話中に自分の音声は正常に伝わって

に話しかけていることが多い。もちろん、アンディは全然吠え返してくれない。だけど、私は他愛もない話を披露して、いつもアンディに聞いてもらっている。そうやって電話を使っているのは私だけではなく、お墓に参られた方が受話器を手にして、じーっと佇んでいる姿を何度か見かけたこともある。おそらく心の中でこの墓に眠る動物たちと喋っているのだと思う。



実家のお寺にあるペット専用の合同墓。黒電話がかわいい。



ボゼン 墓前の BIG LOVE

文=稲田ズイキ (ハロプロヲタク/僧侶)
提供=株式会社生田化研社「^{はかもう}墓詣で」
<https://hakamoude.jp/>

墓を目の前にすると、そこに何かがある「ような感覚がする。たとえば、オカルト話を期待されるかもしれないが、残念ながら私には霊は見えない。」

墓、それは石。多くの場合は花崗岩でできているらしい。私はその四角い物に「見えない何者か」を感じ、ついつい墓前で話しかけてしまうのだ。

ドラマを見ていると、墓前で一升瓶を片手に「乾杯」とかと涙ながらに語り出すシーンを目にするところがある。まさに私はそれなのだ。ある時には「お元気でですか？ 私は元気で」などと気の抜けた挨拶を、またある時には「おじいちゃん、おばあちゃん、俺、受験失敗したよ」と近況報告をする。私と墓の関係は、ぬいぐるみと人間のそれのように秘密めいていてファンシーである。

とはいえ、実際に口に出す人は一部なのかもしれない。でも、心の中でお話している人はまあまあいるんじゃないだろうか。

私の実家のお寺には、ペット専用の合同墓が一基ある。ちよつと変わっているのは、その墓石の傍に黒電話と椅子が設置されているところだ。電話線はつながっておらず、受話器をとつても何も聞こえない。この先鋭的な意匠は母のアイデアで、母曰く「お墓ってゆっくりしたいのに、なんもないからじつとしてられへんやん。だから電話があればゆっくり話せると思ってん」との考えがあるらしい。

この墓にはアンディという名前の愛犬が眠っている。私もお参りするのだが、椅子に腰掛けて受話器を耳に当てると、いつの間にか心の中でアンディ

るかどうかを確かめるためのものだ。例えば「これはみかんです」といった、意味を伝達する言葉は、相手に届かないことには効力を発揮しない。一方、「もしもし」などの「メタ・メッセージ」と言われる言葉は、相手に伝わるまでの過程で働き、相手に聞こえた瞬間にはその役目を完了するところに特徴がある。

さらに、違いは自身への「フィードバック性」にもある。「もしもし」と言つて相手の反応がなかったとき、私たちは相手の電波状況と同時に、自分自身の電波状況を確認する。このとき「もしもし」の一言は、私から相手に向かいながらも、自分と相手の間で浮遊しているように思える。「もしもし」が浮遊し続けている間は、お互いに相手の存在を意識しながらも、意味が伝達されない関係性が立ち上がるのが興味深い。

なんとなくそれは、恋をする二人が映画館で映画を観終えたときの、あの感覚に近い気がする。暗闇の中で、お互いの姿も曖昧で、一言も言葉を交わしていないのに、何か一生分くらいの会話をしたような詠嘆が胸に残る、あの感覚。たぶん、恋人たちは一つの映画を通して、「もしもし」「もしもし」「もしもし」を続けているのだと思う。

墓前で語りかける言葉は、こうした「もしもし」に近いのではないだろうか。たぶん何かを伝えたいわけではなく、目の前にいるはずの、目には見えない何者かに向かって「あなたはそこにいますか？」と尋ねたくて言葉を投げかけているのだ。私たちの言葉には、そういう機能が備わっている。

そして、「そこにいますか？」の問いかけは、相

手の交信状態を探りながら、同時に「私はここにいますよ」と発信することであり、自分自身を目に見えない世界に融和させるためにチューニングしている感覚に近い。

こうしたメタ・コミュニケーションの根源にあるのは、他者という絶対理解できない存在への「敬意」なんじゃないだろうか。一方向的に意味を伝える言葉は、他人が行う自己紹介のように、どうしても自分の文法に他者を引き込んでしまう。その一方、互いのコミュニケーションのあり方自体を問う会話は、自分の文法における他者、他者の文法における自分の両方を同時に確かめようとする、終わりにき所業である。それは関係性に名前をつけず、付き合いの中でお互いを知っていくプロセスのように、自分の世界だけで他者を完結させない優しさがある。

私がどれだけ墓の前でおしゃべりしても、「死者の声が聞こえた」とか、「自分の声が絶対おじいちゃん、おばあちゃんに伝わっている」とは思いたくないのは、そのためである。

届かなくても大丈夫だし、聞こえなくても大丈夫。たとえその発話に意味がなくてもいい。見えないからこそ相手が見えて、聞こえないからこそ相手の声が聞こえる。私たち人間が普段から行っている会話には、そのような自他を独りよがり規定せず、曖昧な存在を曖昧のまま捉えて、つながる術が備わっているのだと思う。

その発露が、墓前で行われているのだ。そう思うと、墓前でおのずと生まれる言葉たちが愛おしく思えてきた。



言葉が煙となって消えていく。

街中ではこんな光景を当たり前のように目にすることができるようになった。0か1かですべてを表すことができるデジタルの世界が、画面を超えて日常に溶け込み出している。

しばらくどのSNSにも投稿しないと、知り合いから「大丈夫？ 生きてる？」と連絡が来ることもある。自分の生存がSNSで発話しているか否かで評価されるの面白いなあと思う一方で、少ししんどい。もちろん気遣いは嬉しいのだけど、中学時代、休み時間に一人で本を読みたくても、周りの目が気になって読めなかったことなどを思い出す。

見えないものと私、「いる」だけの関係性

最近、墓前で喋る頻度が増えた。コロナウイルスの影響で、ダイレクトに人間と出会う機会が減ったからなのか、近頃の私は人よりも墓と話している時間の方が長いんじゃないかとすら思う。

実際に声に出して喋るのが少し億劫に思うとき、私が使っているのが「お手紙線香」というアイテムだ。和紙の製法で作られた紙のお香で、手紙のようにして文字を書くことができる。

火をつけると、お手紙線香はお香のいい匂いを放つ。ゆっくりと火が広がって、書いた言葉が一文ずつ煙になっていく会話体験は贅沢である。自分自身が言葉となって、見えない世界にじんわり溶け出していくようなトリップ感があり、よりいっそう墓参りの「沼度」を上げる要因になっている。



お墓参りのある暮らしを提案するブランド「墓詣で」さんの商品。故人への想いを煙に乗せて伝えることができる。

ただ誰かと何もせずにいたただけなのに、だんだんと一緒にいる「意味」だったり、共にいることの「対価」を問われているような気持ちになる。私が望んでいるのは、ただ「いる」ことなのに。

そんなときに墓前で見えない者と会話していると、安心するのだ。たとえ間抜けに話していたって、私はここにいってもいいんだと、確かめられる貴重な時間なのである。

それはカッコよく言えば、意味の世界からの解放。さらに言えば、相手と私、お互いの存在を立ち上げながら、意味が伝達されず、価値も交換されない二人だけの結界を張る儀式なのだ。おじいちゃんやおばあちゃん、アンディに話しかけていると、落ち着くのはそのためなのかもしれない。

私たちは見えないものと会話することができる。それくらい、人間の「会話」は根源的なものなのだと思ふ。

時に、その見えないものは「押し」と呼ばれる存在が含まれるのかもしれない。墓前の亡き者たちが透

火を付ける。



話し相手が墓ばかりになっているのは、おそらく他にも理由がある。コロナ禍を経て、SNSを中心としたデジタル・コミュニケーションの需要が高まったと世間的には言われるが、私は最近、SNSがちょっと苦手になったのだ。

SNSではすべての会話が「いいね」によって評価されていく、いわば「意味の世界」。自分の投稿はちゃんと面白いのか、誰かを傷つけていないか、そんなことを考えていると何一つ投稿できなくなった。ちょっと気にしすぎなのかもしれないけど。

「うわー今の会話、カメラ回しておけばよかった！ YouTubeあげたやんー」

明な存在ならば、推しと呼ばれる存在は半透明な存在と言えるだろうか。例えば、「コール」と呼ばれる、ライブ会場で推しのアイドルの名前を呼ぶ所作、その声に呼応して推しが自分のことを見てくれたような「幻」を見ること、そんなメタ・コミュニケーションを通じて、推しは知らぬ間に私たちの心に宿っていく、推しと私の関係は、「ただ」いて「くれるだけで尊い」ものへ透化していくように思う。

そのような見えない存在と私の間で成立する「いる」だけの関係性、ひいては、透明なままの状態で私と他者を繋ぎ止める働きに、あえて何か名前をつけるのであれば、私はそれを「Soft Love」と呼びたいのだ。

参考図書

- ・内田樹『死と身体—コミュニケーションの磁場』（医学書院、2004年）
- ・大前栗生『ぬいぐるみとしゃべる人はやさしい』（河出書房新社、2020年）
- ・石川善樹『むかしむかし あるところにウェルビーイングがありました 日本文化から読み解く幸せのカタチ』（KADOKAWA、2022）



和歌山にあるお墓。

フリースタイルな僧侶たち 協賛法人サポーター

浄土宗

安楽寺(南丹市)・延命寺(堺市堺区)・吉祥寺(萩市)・慶蔵院(伊勢市)・金剛寺(京都市東山区)・西明寺(尼崎市)・西林寺(大阪府泉南郡)・正覚寺(青森市)・正善寺(伊丹市)・称名寺(京都府久世郡)・勝楽寺(町田市)・真光寺(今治市)・新善光寺(札幌市中央区)・崇福寺(甲賀市)・青岩寺(七戸町)・善願寺(甲賀市)・善道寺(札幌市豊平区)・臺鏡寺(枚方市)・檀王法林寺(京都市左京区)・潮音寺(東京都大島町)・長壽院(台東区)・念佛寺(八幡市)・梅窓院(港区)・法岸寺(静岡市清水区)・寶松院(港区)・法善寺(大阪市中央区)・妙慶院(広島市中区)・龍岸寺(京都市下京区)

浄土宗西山禪林寺派

宝泉寺(津島市)

浄土真宗本願寺派

覚門寺(福岡県筑上郡)・教専寺(赤穂市)・光栄寺(井原市)・幸

教寺(大阪市生野区)・光照寺(大阪市東淀川区)・西教寺(生駒市)・西方寺(大和郡山市)・西法寺(北九州市)・浄元寺(尼崎市)・正源寺(大津市)・正宣寺(大阪市北区)・浄満寺(大阪市西成区)・信覚寺(福岡県朝倉郡)・崇興寺(福山市)・如来寺(池田市)・養法寺(金沢市)

真宗大谷派

覚法寺(福岡県八女郡)・称讃寺(新潟県長岡市)・正運寺(伊豆の国市)・護念寺(新潟市)・宝皇寺(函館市)

浄土真宗東本願寺派

緑泉寺(台東区)

天台宗

圓融寺(目黒区)・正明寺(姫路市)・本覚寺(横浜市鶴見区)

高野山真言宗

弘法寺(和泉市)・薬師院(岸和田市)

真言宗豊山派

寶積寺(松山市)

真言宗御室派

三津寺(大阪市中央区)

真言宗須磨寺派

須磨寺(神戸市須磨区)

臨済宗妙心寺派

円光寺(台東区)・亘雲寺(江東区)・勝林寺(豊島区)・陽岳寺(江東区)・龍雲寺(世田谷区)

曹洞宗

四天王寺(津市)・瑞生寺(浜松市中区)・南詢寺(守口市)・鳳仙寺(宮城県亘理郡)

日蓮宗

池上實相寺(大田区)・法華寺(亀岡市)・妙海寺(勝浦市)・妙見寺(橋本市)

単立

五百羅漢寺(目黒区)・瑞聖寺(港 (敬称略・五十音順))

区)・法然院(京都市左京区)

企業・団体・店舗

アンカレッジ(港区)・生田化研社(豊島区)・カウントワン(京都市中京区)・京美仏像(京都市北区)・薫寿堂(神戸市・灘区)・神戸数珠店(京都市下京区)・作島(京都市下京区)・茶坊えにし(台東区)・寺院コム(京都市左京区)・翠光堂阪急淡路駅前店(大阪市東淀川区)・大正大学(豊島区)・学校法人鎮西学園(熊本市中央区)・豊田愛山堂(京都市東山区)・一般社団法人日本石材産業協会(千代田区)・はせがわ(文京区)・浜屋(姫路市)・福生(堺市西区)・Flucle(大阪市都島区)・坊主 BAR 緑(岐阜市)

編集部より

第六十号を手にとってくださいありがとうございます。『フリースタイルな僧侶たち』は宗派の垣根を越えたお坊さんが集まって、2009年に創刊されたフリーペーパーです。現在は寺院や書店、カフェなど、全国400ヶ所以上のさまざまなスポットで配布されています。

フリースタイルな僧侶たちは、時代ごとに編集方針を変えながら発行してきました。現在の編集部が掲げているのは「行脚、世界。」という言葉です。本誌が、お寺とこの世にあまねく生きる人をつなげる道になってほしい、そのためにまず私たちが各地を参拝して修行しつづけたという編集部の思いを込めています。自分を知って他者を知り、他者を知って自分を知る、そんな自他の境界線の往来をこの誌面上で表すことができると、いつも頭を悩ませています。

今回は「推し」の文化圏から大きな愛のあり方について思いを馳せた一冊となりましたが、いかがだったでしょうか。次号もまた、フリースタイルな僧侶たちの行脚の旅、お供いただければ幸いです。

あなかしこ あなかしこ。

サポーターを募集しています。

フリースタイルな僧侶たちは、みなさまのご寄付により、紙面制作やイベント運営に取り組んでいます。現在この活動にサポーターとして支援いただける方を募集しています。ご寄付いただける方がいらっしゃいましたら、下記サイトよりお申し込みいただくと幸いです。詳細は担当者よりご連絡させていただきます。

サポーター年会費

個人 5,000円 法人 30,000円

特典

- 『フリースタイルな僧侶たち』を発行ごとに送付
- 主催イベントにおける優待
- 誌面の協賛法人欄にお名前を掲載(法人のみ)

<https://freemonk.net/support/>

配布スポットを募集しています。

寺院・カフェ・書店など、『フリースタイルな僧侶たち』を配布してくださる店舗運営者様には、無料でフリーペーパーを送付しております。スポット登録を希望される方は、下記サイトのフォームにご記入・お申し込みください。

<https://freemonk.net/contact/>

BACK NUMBER



Vol.59
特集『ひとり』
ひとりだと諦めるには、ひとりとは何かを知るしかない。ひとりはどこにあるのだろうか。孤独のあり方について考えた特集。



Vol.58
特集『本気で地獄』
なぜ今、人はこんなにも「地獄」を思っているのか。仏教の世界観の地獄から私たちが日常で感じる地獄までを取り上げた特集。

過去の号は下記サイトからご覧いただけます。
<https://freemonk.net/magazine/>

フリースタイルな僧侶たち 第60号
2022年4月30日発行

発行人=加賀俊裕
編集長=稲田ズイキ
編集=藤山亜弓・釋大智
デザイン=福井裕孝
撮影=K.NORIMASA
Web制作=磯部亮太
表紙ビジュアル=nico ito

発行所 フリースタイルな僧侶たち
〒542-0085 大阪府大阪市中央区心斎橋筋2-7-12
TEL 050-5583-4330
WEB www.freemonk.net

各種 SNS もやっています。

[@freemonk_web](https://twitter.com/freemonk_web) [http://www.facebook.com/freemonk.net/](https://www.facebook.com/freemonk.net/)
[http://www.note.com/freemonk_2020](https://www.note.com/freemonk_2020)

サポーターの声を 聞いてみました



陽岳寺
東京都・江東区

自坊で開催する坐禅会やけん玉のイベントなどで、毎回フリスタを配布しています。普段から門前の掲示板にフリスタを置いているのですが、Twitterで「最新号置いてます」と投稿したら、一日で一気に10部くらい無くなっていることがありました。地獄特集は檀家さんにはちょっと配りづらかったです(笑)



副住職
向井真人さん

